唐木順三全集

第十一卷

筑摩書房版

唐木順三全集第十一卷

昭和四十三年四月二十五日初　版第一刷發行
昭和五十七年五月二十日增補版第一刷發行

著　者　唐　木　順　三
發行者　布　川　角　左　衞　門
發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑　摩　書　房
郵便番號　一〇一－九一
電話　東京(291)七六五一(營業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六－四一二三

印刷　株式會社精興社
製本　鈴木製本株式會社

Printed in Japan　0395—74511—4604

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが小社読者係あてに
ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目　次

夏目漱石

一

漱石概觀……三
まへがき……三
一　逃避と反抗の時代……九
二　反省の時代、或は自己苦惱の時代……二六
三　人生觀照の時代……六〇
附錄　漱石に於ける現實……七八

二

『明暗』論……八五
まへがき……八五
一　『明暗』の成立まで……八六
二　『明暗』の發端……九八
三　『明暗』の運び……一一〇
四　餘錄……一二四

三

漱石における「狂」の問題……一三〇

四

長塚節と漱石……一六〇
鷗外と漱石……一六八
子規と漱石――漱石に於ける俳諧的なるものと倫理的なるもの――……一九六
ケーベルと漱石――二つの椅子の間――……二一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五

作品解説……二二九
『吾輩は猫である』（明治三十八年）……二二九
『倫敦塔』（明治三十八年一月）……二二六
『坊つちやん』（明治三十九年四月）……二二七
『草枕』（明治三十九年）……二二九
『二百十日』（明治三十九年）……二三三
『坑夫』（明治四十一年）……二三四
『夢十夜』（明治四十一年夏）……二三九
『それから』（明治四十二年）……二四二
『こゝろ』（大正三年）……二四四
『道草』（大正四年）……二四五
『人生』（明治二十九年）……二四七
『修善寺日記』（明治四十三年―四十四年）……二四七

『現代日本の開化』（明治四十四年）……二四九
『私の個人主義』（大正三年）……二五〇
『硝子戸の中』（大正四年）……二五一
あとがき……二五四
改訂新版を出すに當つて……二六〇

作家論

……二六一
二葉亭四迷……二六一
『坊っちゃん』にちなんで……二七三
『虞美人草』の頃……二七六
芥川龍之介とプロレタリア……二七九
龍之介、漱石、鷗外と私……二八一
藤村と白秋……二八七
藤村雑感……二八九
武林無想庵……二九二

吉井勇のこと……二〇〇
長與さんと竹澤先生……二〇二
石川淳のゐどころ……二〇六
一　石川淳のゐどころ……二〇六
二　『夷齋饒舌』について……二〇九
幻術師草野心平……二一一

作品論

……二二五
國木田獨歩の『春の鳥』……二二五
長塚節の『土』……二二七
島崎藤村の作品について……二三三
藤村の『新生』……二三七
永井荷風の『小說作法』と『罹災日錄』……二四一
二葉亭、啄木、一葉の日記……二四四
二葉亭日記……二四四

啄木日記……二四六
一葉日記……二四七
寸心、荷風、鷗外の未發表日記……二四八
幾多郎日記……二四八
斷腸亭日乘……二五〇
小倉日記……二五一
日記さまざま……二五二
『宮澤賢治選』について……二六〇
埴谷雄高の『死靈』について……二六六
『現代日本文學序說』の卷末の餘白に誌した自分自身への跋……二六九

思想家小照……二七三

西田門下の人々……二七三
阿部次郎、倉田百三と大正期……二七六
和辻哲郎——自分を大切にした人——……二七九

田邊元……三八〇
西田幾多郎――大丈夫の哲學――……三八一
三木清……三八三
夏目漱石――全集を讀むに價する作家――……三八四
大拙翁の妙……三八五
田邊元全集第十四卷『雜纂』(上)解說抄……三八七
臼井吉見のこと――思ひ浮ぶままに――……三九七
人、ひとに會ふ……四一七
はじめに……四一七
アントニーとクレオパトラ……四一八
ゲーテとナポレオン……四二三
法然と親鸞……四二六
白石とシローテ……四二一
漱石と子規……四四五
ロダンとリルケ……四五〇

アレキサンダーとディオゲネス……四五四
ゴッホとゴーガン……四五九
ダンテとベアトリーチェ……四六四
如淨と道元……四六八
後　記……四七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夏目漱石

一

漱石概觀

まへがき

漱石は一箇の紳士であつた。いや社會的に紳士たるを餘儀なくされた。

漱石は道德的に潔癖であつた。殊に嘘に對して敏感であつた。

不幸にして當代に於ては、この二つは矛盾である。相容るべからざる對立である。

これに苦しんで漱石は神經衰弱になつた。その神經衰弱から漱石の作品が生れた。

實生活に於て彼は悲痛な紳士であつた。窮屈な嘘をくり返してゐた。そしてその悲痛と窮屈のはけ口を想像の國に求めた。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る」(『草枕』)。さういふ態度のもとに彼は幾つかのロマン的な小品を生み出した。

『猫』に於て、『坊つちゃん』に於て、大體に云へば『虞美人草』に至るまでの諸作品に於て、彼は抑壓されてゐた實生活の紳士面の、袴をきた窮屈さをはらひのけて、內心の鬱憤を一擧に爆發させた。彼のヒステリイに於ける饒舌が、凝つて固まつて作品になつたのである。彼はそのヒステリイに於て、自身を紳士に祭り上げた社會に對して、毒舌と皮肉を思ふさまに投げつけた。明治四十年に書かれた『虞美人草』の結語「此所では喜劇ばかり流行る」は、同時に人生に對する當時の漱石の結語でもあつた。

彼はこの喜劇の何處から來るかを考へはじめた。そして、それを當時の社會事情と、經濟狀態と、それに適應してまでも生きてゆきたい淺ましい生活慾に歸した。

「代助は人類の一人として、互を腹の中で侮辱する事なしには互に接觸を敢てし得ぬ現代の社會を、二十世紀の墮落と呼んでゐた。さうして、これを、近來急に膨脹した生活慾の高壓力が道義慾の崩壞を促したものと解釋してゐた。又これを、此等新舊兩慾の衝突と見做してゐた。最後に、此生活欲の目醒しい發展を、歐洲から押し寄せた海嘯と心得てゐた。」「然し今の日本は、神にも人にも信仰のない國柄であるといふ事を發見した。さうして、彼は之を一に日本の經濟事情に歸着せしめた。」さう漱石は、『それから』の主人公を通じて自らを語つてゐる。經濟事情が、その時代の觀念を規定する事實を漱石は知りぬいてゐた。

だが、舊い道義慾を固守する時、この經濟事情はそれを破壞する暴力として映らざるを得ない。そして、この社會に自らを適應させて、相互に信頼をもたず、互に侮辱し合ひつつも生きる生活慾は、痛ましき喜劇であると

同時に、また墮落であると見えた。しかも舊き道義慾の上にたつて、現實社會を、拱手して墮落と觀じ、喜劇と見做すことは、明らかに自身が社會から遊離した存在であることを意味する。漱石は退いてこの墮落を憂ひ、或は痛ましき喜劇を冷笑する人であつた。

明治三十五年、ロンドンにあつた漱石は、つとにその義父に宛ててかう書いてゐる。「國運の進歩は此財源を如何に使用するかに歸着致候。只己のみを考ふる數多の人間に萬金を與へ候とも只財產の不平均より國歩の艱難を生ずる虞あるのみと存候。歐洲今日文明の失敗は明かに貧富の懸隔甚しきに基因致候。此不平均は幾多有爲の人材を年々餓死せしめ凍死せしめ若くは無教育に終らしめ却つて平凡なる金持をして愚なる主張を實行せしめる傾なくやと存候。（中略）日本にて之と同樣の境遇に向ひ候はゞ（現に向ひつゝあると存候）かの土方人足の知識文字の發達する未來に於ては由々しき大事と存候。カール・マークスの所論の如きは單に純粹の理窟としても缺點有之べくとは存候へども今日の世界に此說の出づるは當然の事と存候。」

ブルジョア社會の必然的趨勢を單に「喜劇」として、或は舊き立場より墮落として眺めとつた漱石にあつては、この趨勢に原理的に對立する階級が見落されたことは當然であり、理論もまた大衆を把握するや物質的力となるといふことを知り得なかつたのも自然である。

この喜劇と墮落を自己のまのあたりに住む社會の必然的傾向に歸するとき、人は常に自らを孤高に保たざるを得ない。人間嫌ひと、救ふべからざる孤獨は其處から生れる。が、この孤獨は自らを再反省せしめずにはおかない。

この反省に於て、自己は二つの分裂として現れる。卽ち、我々は生きてゐる限り、社會の一員として、生活慾から來る喜劇と墮落の實演者以外の何物でもない。と同時に、この社會的自己、生物的自己を墮落した喜劇的人

物の一人と見る自己は明らかに他の自己である。

前期に於て社會と自己とを對立させて、社會一般に白刃をかざした漱石は、この再反省に於て、今や自己に於ける社會的なるものと、自己に於ける社會を呪詛するものとを對立せしめざるを得なくなつた。社會にかざした白刃は、今や自らの頭上にもかざされざるを得なくなつたのである。かくして漱石は自らの心を掘つて、『三四郎』『それから』『門』『行人』『心』と下る。これらの作品を生み出した時代を中期としよう。

漱石に第二の轉向が見舞つた。その契機となつたのは明らかに、また諸家の主張する如く、修善寺での吐血を中心とする大患期である。

「かく單に自活自營の立場に立つて見渡した世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社會は不正で人情のある敵である。もし彼對我の觀を極端に引延ばすならば、朋友もある意味に於て敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。さう思ふ自分さへ日に何度となく自分の敵になりつゝある。疲れても已め得ぬ戰ひを持續しながら、茫然として獨り其間に老ゆるものは、見慘（みじめ）と評するより外に評しやうがない。

古臭い愚癡を繰返すなといふ聲が頻りに聞えた。今でも聞える。それを聞捨てにして古臭い愚癡を繰返すのは、しみ〴〵さう感じたから許りではない、しみ〴〵さう感じた心持を、急に病氣が來て顚覆したからである。」

彼は當時を追懷して、『思ひ出す事など』（明治四十三年十月以後）の中にかう書いてゐる。

そして、「仰向に寢た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み惡いとのみ觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた」とも書き、「余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた」とも書き加へた。當時の句、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com